

# 要 約

報告番号	甲 ㉔ 第	号	氏 名	秋 山 美 紀
<b>主 論 文 題 名</b> The effects of community-wide dissemination of information on perceptions of palliative care, knowledge about opioids, and sense of security among cancer patients, their families, and the general public (緩和ケアの地域啓発プログラムが、がん患者、家族、一般市民の緩和ケアの認識、医療用麻薬の知識、安心感へ与えた効果)				
<b>(内容の要旨)</b> がん患者が地域で安心して療養生活を送る上で、緩和ケアや医療用麻薬、在宅サービスに関する誤った知識や理解不足が隘路になっていることが指摘されてきた。しかし、地域レベルでそうした知識普及や啓発を行った事例は過去にほとんど例がなく、そうした地域介入が、一般市民、がん患者、その家族といった集団にそれぞれどのような影響を与えるかを比較する研究は皆無であった。そこで国内4地域で3年にわたり、緩和ケアや医療用麻薬および地域で提供している緩和ケアサービスについての情報をリーフレットや冊子、講演会といった手法を用いて提供する介入プログラムを実施し、それらの情報に対する曝露の程度と知識やイメージ、安心感の変化との関連性について検討した。 介入の前後で、がん患者、患者の家族（遺族）、一般市民に質問紙調査を実施し、提供した情報への曝露状況、緩和ケアや医療用麻薬に関する知識やイメージ、地域で療養することについての安心感を調査した。提供した情報への曝露の度は、事後調査の際に実際に各地域で配布したリーフレット等の素材を見せて選択肢式で収集した。緩和ケアの認識や医療用麻薬の知識、安心感が、それぞれの対象者集団の異なる曝露集団間でのどのくらい差があるか、ロジスティック回帰分析を行い、調整済みオッズ比を計算した。各質問紙調査への有効回答数は、患者（前859、後857）、遺族（前1110、後1137）、一般市民（前3984、後1435）であった。緩和ケアの認識、医療用麻薬の知識は、介入前後の集団間の比較では、一般市民集団と家族集団では有意に改善していたが、患者集団には有意な改善は見られなかった。しかしながら、多変量解析の結果、患者の中でも曝露レベルの高い群は、非曝露群に比べて、緩和ケアに対して好意的な認識や良いイメージを持っていた ( $p=0.02$ )。地域で療養することへの安心感は、患者、家族、一般市民いずれも有意に改善していた。中でも、一般市民と家族の高曝露群は、安心感スコアが有意に高かった。 以上より、コミュニティレベルで、リーフレット等のスモールメディアや講演会等の手段を用いて緩和ケアの情報提供を行うことによって、地域住民の緩和ケアの認識や麻薬の知識を改善できることが示唆された。複数の情報源から適切に情報を得られる環境をつくるのが、地域におけるがんの療養について安心感を持ってもらえることにつながると考えられる。				